
仮説 葉書き物語「第二章」

午雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮説 葉書き物語「第二章」

【Nコード】

N9660X

【作者名】

午雲

【あらすじ】

文明以前の時代。常春の島に住まう村人たちの物語り。火を発明した後、さて、今度は何を発明しますやら。そんな感じでいきたいと思います。相変わらず予定は未定。かしこ。

その壱 炎の英雄

隕石到来後の長い氷河期を耐え抜いて、ようやく迎えた活動の時。

火山から噴き出すマグマが、常春の島を祝福する。

島に在って最も高い御山、霊峰ウス・・・

その中腹に集落をなす、ここタテボーグ村。

村の長は代々、タテボーグと名乗る事が、遥か大昔から定ま
居た。

常春の島に火をもたらした父娘、ア・リタとア・キラ。

熊をも恐れぬ男、ア・リタの名声は殊に高まった。

「畏れながら次の長に就くのは、炎の英雄ア・リタに違いない」

「うむ」

「そうじゃ、そうじゃ」

タテボーグ村の住人たちは早くも噂しあった。

ア・リタ、彼の右腕には、

それ炎と見間違^{みまち}う痣^{あざ}が付いて居たからである。

村の男子の間では、腕にわざと火傷やけどを負って、

思い思いに痣を着ける事が、ひそかにお約束とは成りつつあった。

片や、娘のア・キラも、やはり英雄と見なされるように成った。

彼女は髪をおろし、ヒマつぶしに三つ編みして首に巻きつけて居たのだが、

その髪型が、いつしか村娘たちのお約束の髪型とは為ってしまった。

キラ本人は、もう止めようとして居たのに、

気がつくと、

「ア・キラ式。」

として、自分以外の女の子は皆、編み毛に凝って居た。

「へびみたいで、気持ち悪くない？」

キラが注意すると、

「ア・キラ、あなた、その名前、禁句よ！」

「あからさまに口に出しちゃダメなのよ！」

「名を呼ぶと呼ばれたかと思って本当に近寄って来るんだから！」

逆に、みんなから叱られてしまった。

（変なの・・・）

（そんな髪型してたら、つられて出てくるんじゃない？）

言い返したくて、口がむずむずしたけれど、

その台詞は、胸のうちだけに留めておく、キウだった。

（つつく）

その壱 炎の英雄（後書き）

物語りオンリーで行きます！よろしくお付き合い下さいませ。かしこ。

その二 巫女と従者

ア・キラのもとに、おと長の洞窟からの伝言が届く。

「んにゃ」

やってきたのは、ヤ・ニコ。

巫女サ・ヤカの従者ヤ・クラになつく猫だ。

猫語も通じるこの時代・・・

ア・キラは、巫女サ・ヤカからの招きとさと覚って、

ヤ・ニコと共に出かけた。

長タテボーグの洞窟・・・

その戸だけは平らかな一枚岩を用いてある。

ヤ・ニコが呼びかけるまでも無く、

従者ヤ・クラに見守られて、

巫女サ・ヤカが自身、表で待つて居た。

「キラ、よく来たわね！」

「ヤカ姉、何の用なの？」

二人は幼馴染の間柄なので、何の気兼ねも無いのであった。

「水浴びよ、水浴びに行こうと思って、ー」

「それでそんな恰好してるの？ヤカ姉」

「そ、そうよ・・・」

サ・ヤカ、彼女は髪のをまとって、

およそ巫女らしからぬ装いをして居た。

「ヒロイン・キラがついて居れば、安心よね？外へ出歩いてもー」

「ヒロイン・キラ？」

「みんなそう呼んでるわ、もう誰もキラ、あなたには礼をするでしょう」

「そうなの？」

「だってあの御山から生きて帰って来たんだもの。勇気のしるしには充分よ！キラ。」

「そうですとも！ヒロイン・キラ。」

従者ヤ・クラも一緒になって笑みをたたえる。

「・・・でも、オオカミには勝てないわ」

キラは坂の下、遠くへ目をはせる。

「昼間はオオカミよりヒトよ。わたしにとっては、ー」

ヤカ巫女が身震いの仕草をしてみせる。

そう、千年に一度の美女と謳われる彼女にとっては、ー

盛りのついた男共のほうが余程、恐ろしい存在なのであった。

「本当は怖いんだけど、清水に身をひたさないと調子でないのよね」

ヤカ巫女、彼女がいう調子とは、

つまり靈感のコトである。

「ヤ・クラだけでは不足ですか？ヤカ巫女。」

「あなたは私の前では無口だから正直、退屈なのよね」

大男たるクラを見上げて、唇をとがらす彼女。

「・・・役目ですからな」

クラはぶ然たる面持ち。

「来るなど言われてもお伴いたします」

「今日はよい・・・来るな」

（！？）

「そ、そんな・・・ヤカ巫女」

「来るでない」

「そ、そんな・・・」

（・・・）

（・・・仲良しなんじゃ、ない？このふたり・・・）

見て居て、キラは、そう思う。

結局、三人して、秘密の川へと出かけるのだった。

（つづく。）

その二 巫女と従者（後書き）

思いだすのに、ひと苦労・・・（ウソ）。

序章の五以降を拾い読みして下されば、ーありがとうございます！

その三 暗がりの泉

道とは見えぬ道であっても道と見える。

ヒトの通い道も、この時代、そうであった。

岩伝い、岩肌を登ってゆく。

ヒトは足元ばかりみて歩いて居たので、上に行くほうがむしろ安全なのだ。

「ヤカ姉、守りびとは付けなくていいの？」

「お忍びだから、いいのよ。」

よじのぼりながら、ヤカ巫女がいう。

「それに私の本当の守りびとは、ここなクラだから。」

「さよう、さよう」

少し離れた所から、ヤ・クラが応える。

「クラ、私には他人の気配が分かるので、虫よけには、もってこないのです」

「虫よけ？」

キラがきくと、

「さよう、ヤカ巫女に触れようとする悪い虫です」

そういつて、クラは笑いだした。

「キラ、あなたもそろそろ守りびとをさがさなくちゃならないわね」

「わたしが？」

「もう大人でしょ？ヒロイン・キラ。」

（・・・大人？）

キラには、いまいちピンと来ない。

崖の頂きに至ると、三人は立ち上がり、清水湧く泉に出会う。

そこが水源と為って、谷川を成して居るのであった。

ザブン。

めいめい泉に漬かって、身を清める。

岩陰につき、暗がりの下にあつて、

こんこんと湧く水の音だけが辺りに響く場所。

なので、水浴びには格好の泉なのであった。

「ヤカ姉、クラは男の人でしょう?」

「なに? 恥ずかしいの? キラ。」

「いえ、あの、ちょっと近すぎるなあと思って、」

キラの言う通り、クラの頭は手を伸ばせば届きそうな所に突き出て居た。

「いや、素潜りで近づく者が居るやもしれず、ーこれも役目でござる」

むこうを向いたまま、クラが応える。

「ヤカ姉、こわくないの?」

「なにが?」

「だってクラはとっても強そうじゃ、ない?」

「あら? キラ、あなたの父さんはどうなのよ。」

「え?」

「・・・強そうだから、こわい?」

「ううん。ちつともこわくない。」

「同じよ。クラ、彼は私の守りびとだもの。」

「そうなの？」

「あーこんな場所でふたりきり、心ゆくまで過ごしてみたいな・・・」

ヤ力がふと口ずさむ。

「え？誰と？ヤ力姉。」

「秘密じゃ、それは言えぬ」

巫女の口調にもどって、急に、そっぽをむくヤ力。

「わたしにだけは教えてくれてもいいんじゃない？」

「それはできぬ」

（・・・・・・）

クラ、守りびとは黙り込み、

ひたすら聞こえないふりをするのだった。

（つづく。）

その四 白い蛇

巫女サ・ヤカが水浴びする、暗がりの泉。

他人目につかぬ場所でもあり、

流れに逆らってまで泳いで来る者も居ない。

子供に返って、魚と追いかけてこするのが、彼女の楽しみであった。

やがて、守りびと、ヤ・クラが声をかける。

「ヤカ巫女、そろそろ戻りませんと、ー」

「さようか」

「もう帰るの?」

水の中から、キラも顔をだす。

「ヒト以外の生き物も居りますからな」

「どこに?」

ヤカがきくと、

「あそこに、ー」

クラが背後の岩陰を指さす。

つられて振り向き、

「い・・・」

ヤカ巫女は、たちまち息をのむ。

見ると、白い蛇が岩場を這って頭から先に水面に下りようとして居た。

「一緒に遊ぼうって言うてるのかしら？ねえ、ヤカ姉。」

キラが背中越し、呼びかけると、

（プクプク・・・）

ヤカ巫女は気を失って、水底へ沈みかかって居た。

「ヤカ巫女、あなたにも怖いものが御有りでしたか」

彼女を支えながら、クラがいう。

白い蛇は、キラの手に載り、腕を伝って、頭に乗った。

「・・・どうしよう？クラ。」

「やはり、その・・・編み毛が気に入ったのでは？」

その光景に、クラも冷や汗。

「これからは、その生き物のことを”い”とよびましょう」

「どうして？」

「先ほどの叫び声・・・ヤカ巫女にならって・・・」

（怒られない？）

（なぜ怒るのです？）

キラの気も知らず、クラは笑い顔のまま聞き返す。

しばらくして、ヤカ巫女が目を開くと、

キラ、彼女の頭に白い蛇が居るのが見えて、

「い・・・」

また、気を失う。

「ヤカ巫女の声は神神のお告げでもありますからな」

（・・・）

（・・・びっくりしたら、だれでも言うんじゃない？）

白い蛇の頭をなでながら、少し、そう思ってみるキラだった。

（つづく。）

その五 風穴

水浴びを済ませて、帰り道。

岩場の上に立って、キラは遙か地上を見下ろす。

「これを下りるの？」

足が滑ったら終わりの気分がする。

「さすがに無理ね！こっちょ、キラ。」

横合いから、ヤカの声。

見ると、もう歩きだして居た。

かや草が生い茂る道を少しゆくと、

（！？）

そこだけ草が結んであるのが目に留まる。

ヤカは、ちらっと目配せして、

（しっ）

くちびるに人さし指をあてる仕草。

キラはひとつ、まばたきしてうなづく。

（サヤサヤ・・・）

かすかな草ずれの音を鳴らして、

その結び草を目印に、三人は草むらの向こうへと消えた。

果たして、その先には、

（ヒュウー）

絶えず風が吹き出すという、

あの風穴ふうけつが口を開けて居た。

「なに？これ。」

驚くキラへ、

「抜け道です、ヒロイン・キラ」

クラが教える。

「この風穴に入れば、ウチへ帰れるってわけ！」

つづいて、ヤカが打ち明けた。

長の洞窟、そのもうひとつの入口の前には、
いつか見た草まくらが並んで、

そこに持ち主が居る事を、外へ示して居た。

（行きしなの苦勞は何だったの？ヤカ姉。）

（あ、あれ？）

キラのささやきに、ヤカはキョロキョロ。

（た、たまには運動した方が良かなーと思って・・・）

（・・・イジワルっ）

命がけで登った岩肌を思い出して、

さすがに腹立ち顔するキラだった。

（つづく。）

その六 なつかしい声

薄暗い洞窟にあつては、夜目^{よめ}が利く。

風穴の外から届く日の光・・・

それが極くわずかに為つても、

野生の眼力を働かせれば、補つて余りあるのであつた。

「この風・・・どこから来るの？ヤ力姉。」

「さあ・・・神さんにでも聞いてみれば？」

頬をなでる向かい風にも、ヤ力、彼女は涼しい顔。

風穴のなかには道が入り組んで居て、

その全てとなると、よく分からないのであつた。

途中、ふと立ち止まって、クラが指さす。

「ほら、ここに牛の絵が描いてあるでしょう。」

「ほんとだ！そっくり！」

クラの声に、キラが応える。

「ここで曲がれと言って居るのです。」

「だれが？」

「牛が。」

「この牛を描いた御先祖さまがじゃ。」

ヤカが、巫女の口調に為って、言い添える。

「風穴のなかでは、絵が道しるべなのです」

「ふーん」

クラの言葉にキラがうなづき返す。

まるで大きな蟻の巣のような迷路を、

三人は列をなして、ゆっくりと進んで行った。

「御帰りなさい、ヤカ巫女。」

やがて、通路の先から出迎えの声が届く。

「おお、シキか。」

いち早く、ヤカ巫女が声を挙げる。

「そんな遠くから、なぜ、わかる？」

「においが・・・」

（！？）

聞き覚えのある台詞に、キラが目を瞬く。

「シキ・・・シキなの？」

「お久しぶりです、ヒロイン・キラ」

いつかと変わらぬ、なつかしい声。

暗闇の中、キラの顔がぱつと輝く。

近寄って来た彼、その名はヤ・シキ・・・

力者^{りきしや}ヤ・クラの息子にして、

片目が蒼い少年だった。

（つづく。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9660x/>

仮説 葉書き物語「第二章」

2011年11月4日13時19分発行